

国立公文書館が所蔵する「朝鮮本」解題(二)

尼子昭彦

国立公文書館では、約一六七部の「朝鮮本」を所蔵して閲覧に供している。

これらの「朝鮮本」の中には、自国では早くに滅びて姿を消し去ったものが、かえって我が国において大切に伝え保存されている例もある。

そこで、一般の方々を対象として、国立公文書館が所蔵する「朝鮮本」各々に記載された内容を中心に、できる限り平易な文章でこれらを紹介することにした。本稿は、その第二回目当たる。

さて、前回の稿に対して畏敬する先生方から貴重なご意見を頂戴した。これについては、最終稿に反映する予定である。

国朝儒先録 (四冊)

「請求番号 史二二七 三」

第十四代国王宣祖(一五五二—一六〇八)の命令に従って、朝鮮の儒学者、金宏弼・鄭汝昌などの著作を柳希春が編纂した書物である。

李後白の序文に、次のように記している。性理の学(中国の宋代に成立した儒学の一派で、いわゆる朱子学)を好んだ宣祖は、ある日、柳希春にこのように語った。「李彦迪の文集は以前、目にしたことがある。しかしながら、彼以外の優れた我が国の儒学者である金宏弼、鄭汝昌、趙光祖らの著作は目にしたことがない。もしも彼らの著作があるのならば、私のために集めてほしい。」と。このことばに従った柳希春は、『景賢録』「請求番号 二九〇 七二」などの書物から重要な箇所を抜粋して本書を編纂し、『国朝儒先録』という題名をつけた。

柳希春(字は仁仲、号は眉巖)は書物に目を通し終えるとすぐさま暗誦するほどの才能に恵まれた人で、官職は副提学に在った。

なお、金宏弼と鄭汝昌は金宗直の弟子で趙光祖は金宏弼の弟子である。いずれも李彦迪とともに、当時の大儒学者とされた。

礼記浅見録 (一〇冊)

「請求番号 二七四 三三一」

本書は、李穡の弟子である権近が、『礼記』を解釈する上で疑問を抱く箇処について、その見解をまとめたものである。この書物を一読して絶賛した第三代国王太宗(一三六七―一四二二)は校書館から刊行させたが、刊行部数が少なかったため、十三年後に再び刊行させることとした。けれどもそれから三百年の後に、板木が焼失したために、肅宗(一六六一―一七二〇)の時代に改めて宋廷奎が刊行した、と伝えられている。

権近(字は可遠、号は陽村)は、高麗王朝(九一八―一三九二)の滅亡後、李氏朝鮮に仕え、当時の詩文の第一人者とされた。

『礼記』は、漢の戴聖が周末から漢代までの礼に関する儒学者の説を編集したもので、『五經』(易經・書經・詩經・礼記・春秋)の一つである。

また清少納言、『枕草子』三十八の「鸚鵡、いとあはれなり。人の言ふらむことをまねぶらむよ(鸚鵡は、たいそつけなげな鳥だ。人のことばをそつくりまねするということではないか)」の出典ともなった『礼記』曲礼の「鸚鵡能言、不離飛鳥(鸚鵡は能く言えども、飛鳥を離れず)」。鸚鵡は人のことばをまねることができるが、しよせんは鳥であることに変わりはない。」「など、我が国の平安文字にも影響を与えた。

易学啓蒙要解 (二冊)

「請求番号 二七三 一一〇」

本書は、南宋の朱子(一一三〇―一二〇〇、朱子学の大成者)が著した易の解説書『易学啓蒙』「請求番号 二七三 四三三」が高度な内容であるために、朝鮮国の初學者には理解しにくいと考えた第七代国王世祖(一四一七―一四八八)が、崔恒や韓継禧たちに命じて、分かりやすい解説をつけ加えて出版させた書物である。

易とは、周代に成立した筮竹(五十本の細長い竹で作った棒)を使う占いである。そして、その占いの吉凶の判断のことばを記した書物が『易経』で、儒教の経書の一つである。また、『易経』には我が国の倫理思想にも影響を与えた、「積善の家には必ず余慶あり。積不善の家には必ず余殃あり(善行を積み重ねた家には、子孫に至るまで慶福が及び、不善を積み重ねた家には、子孫に至るまで災禍を受けるものである。)」などのことばが記されている。

なお、崔恒(字は貞父、号は太虚亭)は、『高麗史』(高麗王朝「九一八―一三九二」の歴史を記したものの)の編纂に加わり、韓継禧(字は子順)は国家の功臣として著名であった、と伝えられている。

朱子書節要 (一〇冊)

「請求番号 子二四八 一一」

本書は、李滉が『朱子大全』「請求番号 別二二 一」のうち、朱

子の弟子や友人たちとの往復書翰をまとめた尺牘集四十八巻から朱子学の入門に最適と考えられるものを取捨選択して、二十巻にまとめたものである。

生前、李滉はこれを刊行することもなく、その弟子たちが書き写して学ぶがままにしておいた。しかしながら李滉の没後、弟子たちがこれを刊行して普及させたといわれている。

李滉(字は景浩、号は退溪)は人格高潔で、その進退は礼に従い、正統な学問を修め、世の中の模範として尊敬されるとともに、東方の儒宗(優れた儒者)と称えられた。また、『易学啓蒙』(本稿の『易学啓蒙要解』を参照)の解釈書として『啓蒙伝疑』を著して、独自の見識を示した。

天命図説 (一冊)

「請求番号 子二五〇 二」

本書は、鄭之雲が弟の鄭之霖のために、性理の説(いわゆる朱子学)を理解しやすく解説したものである。

鄭之雲は師に当たる金慕斎と金思斎とにこの著作の誤りを正すように依頼していたのであるが、二人とも没してしまい、そのままとなっていた。後、李滉(号は退溪)略伝については、本稿『朱子書節要』を参照)にこの著作を提示して、疑わしい点や誤りを正して完成させたと伝えられている。

鄭之雲(字は静而、号は秋巒)は金慕斎・金思斎兄弟の弟子であったが、仕官することなく学究生活を送ったという。

聖学輯要 (五冊)

「請求番号 二九九 一六四」

本書は、李珥が弘文館副提学であったとき(宣祖八年)、儒学と政治の参考書として著したものである。

李珥は、朱子の門人真徳秀(字は景元)が『大学』(「四書」の一つ)の教えを敷衍して帝王の政治のあり方を説明した『大学衍義』に不備があると考えて、聖賢のことをばを引用して説明を加え、統説、修己、正家、為政、聖学道統の五篇を著した。この書は第二十一代国王英祖(二六九四～一七七六)が序文を与えて、朝鮮で広く普及した書物でもある。

『大学』はもと『礼記』の一編で、南宋の朱子が整理して注釈である大学章句を作ったもので、学問修養に基く政治の理想を述べた書物である。「心正而后身修。身修而后家齐。家齐而后国治。国治而后天下平(心正しくして后身修まる。身修まりて后家齐う。家齐いて后国治まる。国治まりて后天下平かなり)心が正しくなつてこそ、身が善良に修まる。身が善良に修まってこそ、家族が和合する。家族がわが和合してこそ国家が安らかに治まる。国家が安らかに治まってこそ、天下が平和になる」として、修身を根本とする『大学』のこの文章は有名である。

国朝五礼儀 (九冊)

「請求番号 子二七八 六一」

本書は、第四代国王世宗(一三九七～一四五〇)が許稠らに命じて、礼に関する古今の書物などを参考として五礼の記述編纂に着手させ、更に第七代国王世祖(一四一七～一四七八)は五礼の中から実際にとり行なうべきものを選択して編纂を姜希孟らに命じ、後、成宗五年(一四七四)に申叔舟、鄭陟らによって完成したものである。
なお五礼とは、「吉礼(祭祀などの儀式)・嘉礼(元服などの儀式)・賓礼(国賓などをもてなす儀式)・軍礼(軍事に関わる儀式)・凶礼(喪や葬式の儀式)」をいう。

申叔舟(字は泛翁、号は希賢堂または保閑齋)は太宗十七年(一四一七)に生まれ、世宗・文宗・端宗・世祖・睿宗・成宗の六代に仕え、その要職を歴任した。経書や歴史に詳しく、外交文書の作成や世宗の訓民正音(ハングル)制定に関わり、また世祖六年(一四六〇)に満州の女真族を征伐するなど文武両面に功績があった。『海東諸国紀』などの著書がある。

陣法 (一冊)

「請求番号 子二五七 一一」

本書は、歴代の兵書の中から陣法(軍勢を配置する方法)と行軍(軍隊を動かすこと)について記されている部分を抜粋して、実用の

書とすることを目的として編纂したものである。

当時の武人が弓術と馬術を学ぶだけで、最も重要な戦法をおろそかにしていたことを不満に思った韓孝純の著作である。

韓孝純(字は勉叔、号は月灘)は、十四代国王宣祖(一五五二～一六〇八)のとき左相に就任したと伝えられる。

句解南華真経 (五冊)

「請求番号 三一一 二二四」

本書は、中国宋代の林希逸の著した『南華真経口義』に注釈を加えたものである。著作は不明。なお、巻末に李士表の新添莊子十論を収める。

『南華真経』とは『莊子』の別名で、唐の玄宗が莊子に南華真人の号を追贈したことによる。

莊子は、戦国時代の道家に属する思想家。

「似木鷄矣(木鷄に似たり)敵意を抱かない者に対しては、これに反抗する者はいない。つまり、無心で他者に対することが万事を処理し、困難にうち勝つ最上の方法であることのとえ」など、人為を否定し自然と一体となることを主張した。

訓蒙字会 (一冊)

「請求番号 二七八 一四六一」

本書は、燕山君(エンザンクン) (一四七六～一五〇六) のとき同知中樞事に就任した崔世珍(サイセイジン) (字は公瑞) が、分類した漢字を四言の韻文で表し、それらの漢字の音や意味をハングルによって解説した入門書である。ハングルの用法が巻頭に記されている。

東史纂要 (八冊)

「請求番号 史二二四 一」

本書は、吳淦(ユウケン) が新羅(四世紀半ば～九三五)・高句麗(前三七～六八)・百濟(前一八～六六〇)、または三四六～六六〇)の各国の変遷の歴史について、『三国史記』『高麗史』『東国通鑑』などの歴史書を参照して編纂したものである。

吳淦(字は太源、号は竹牖)は、第十三代国王明宗(一五三四～六七)のとき工曹参議に就任したと伝えられる。

牧隱文藁 (二三冊)

「請求番号 三一八 一六〇」

本書は、高麗屈指の大家とされる李穡の遺稿集である。牧隱とは李

穡(字は穎叔)の号。高麗の忠肅王(一二九四～一三三九)のときに生まれて益齋に師事し、恭愍王(一三三〇～七四)のときに門下侍中に就任、高麗滅亡のち李朝の太祖(一三三五～一四〇八)の招聘に応えることなく一生を送ったと伝えられる。

本書は、年譜・行状(死者のために生前の業績などを記した文)・詩・文・表・書・銘などで構成されている。

秋江集 (四冊)

「請求番号 集一三六 三」

本書は、南孝温(字は伯恭)の文集である。秋江とは、南孝温の号。

兪泓之によって刊行された『秋江集』は戦乱によって焼失したために、のち肅宗三年(一六七七)に改めて出版されたといわれている。

南孝温は第六代国王端宗のときに生まれ、金宗直に師事した。当時は儒学の影響によって、師が弟子を呼ぶときは弟子の実名を口にするのが礼であったが、金宗直は南孝温が優秀であったために師弟関係にとらわれず、礼に従うことなく号で呼んだと伝えられている。

濯纓文集 (三冊)

「請求番号 集一三六 六」

本書は、金駟孫の著した賦・文・書・雑著・序・記・対策・誌・銘

などを収めた文集である。濯纓は、金駟孫の号。

金駟孫（字は李雲）は第七代国王世祖（一四一七～六八）のときに生まれ、第九代国王成宗のとき銓郎に就任した。しかし、燕山君のとき、反乱者として処刑されたと伝えられる。

灌圃先生詩集（一冊）

〔請求番号 集一三六 五〕

本書は、第十三代国王明宗（一五三四～六七）のとき大司諫に就任し、詩人としても著名であった魚得江（字は子游）の詩集である。書名の灌圃は、魚得江の号。

大司諫を退官したのち郷里に戻り、明宗からの再三の招聘に応えることなく生涯を終えたと伝えられている。

二樂亭集（七冊）

〔請求番号 集一三六 八〕

本書は、第十一代国王中宗（一四八八～一五四四）のとき相国に就任した申用漑（字は漑之）の文集である。書名の二樂亭は、申用漑の号。

第九代国王成宗が湖堂（讀書堂）を龍山に設立したとき、選抜されて研究に励んだといわれる。

本書は戦乱によって散逸したために、第十九代国王肅宗のとき改め

て刊行したと伝えられる。

晦齋先生集（一冊）

〔請求番号 集一三六 七〕

本書は、第十一代国王中宗（一四八八～一五四四）のとき贊成に就任した李彦迪（字は復）の遺稿を、子孫である李浚が編集して刊行したものである。書名の晦齋は、李彦迪の号。

李彦迪は第九代国王成宗のときに生まれ、特定の師につき従って学問をしたわけではないが、きわめて正しい学風であったと伝えられている。また、祖先の祭祀の次第を記した『奉先雜儀』などの著書がある。

蘭雪軒詩（五冊）

〔請求番号 集一三六 二〕

本書は、第十四代国王宣祖（一五五二～一六〇八）のとき、金誠立の妻であった許氏の詩集である。書名の蘭雪軒は、許氏の号。

許氏は許暉の娘で、女流詩人として著名であったが、金誠立に嫁いでから早逝したと伝えられている。

霽峯集 (五冊)

「請求番号 集一三六 二」

本書は、第十三代国王明宗(一五三四〜六七)のとき東萊府使に就任した高敬命(字は而順)が著した古詩・律詩・絶句・賦・銘・誌などの詩文を、その子である用厚が刊行したものである。書名の霽峯は、高敬命の号。

高敬命は第十四代国王宣祖(一五五二〜一六〇八)のとき、錦山の戦で戦死をし、忠烈の謚を与えられたと伝えられる。

水色集 (八冊)

「請求番号 集一三六 四」

本書は、第十四代国王宣祖(一五五二〜一六〇八)のとき判尹に就任した許禰(字は子賀)の詩・賦・疏など収めた詩文集である。書名の水色は、許禰の号。

詩を最も得意として、当時の大家であった李安訥もその才能を高く評価していたと伝えられる。

類苑叢宝 (三八冊)

「請求番号 子二五〇 四」

本書は、当時の朝鮮に「類書(多数の書物から、同類の事項に関する記述を抜き出して、各々を分類編集した一種の百科全書)」がなかったことを不満に思った金堉が、『芸文類聚』『唐類函』『天中記』『韻府群玉』などの書物を参考として編集したものである。

その構成は、次の二十七門である。

天道・天時・地道・帝王・官職・吏部・戸部・礼部・兵部・刑部・人倫・人道・人事・文学・筆墨・奎印・珍宝・布帛・器用・飲食・冠服・米穀・草木・鳥獸・虫魚・四夷・神鬼

金堉(字は伯厚、号は潜谷)は、第十六代国王仁祖(一五九五〜一六四九)のときに領議政に就任したと伝えられる。

戦国策 (四冊)

「請求番号 二八六 一三三」

本書は、戦国時代の縦横家が諸侯に説いた政策を、西周・東周・秦・斉・楚・趙・魏・韓・燕・宋・衛・中山の十二カ国別に収録したもので、漢の劉向の編といわれている。

紀元前四世紀後半、戦国の七雄(韓・魏・趙・楚・燕・斉・秦)の中で、商鞅の富国強兵策を採用した秦が他の六国を圧迫していた。このような情勢のもと、戦争による国力の衰退を恐れる諸侯は、平和的

外交によって紛争を回避しようとしていた。蘇秦は韓・魏・趙・楚・燕・斉の六国が縦（南北）に同盟を結んで秦に対抗する「合縦の策」を、張儀は六国が個別に秦と横（東西）に同盟を結んで自国の維持を図る

「連衡の策」を説いた。これらの方策を諸侯に説いた弁舌家が、縦横家である。

有能な人材を集めて国力の充実を図るように燕の昭王に進言した郭隗の、「先従隗始（先ず隗より始めよ）」人を採用するなら、先ず私から採用して下さい。そうすれば、世の有能な人々はある郭隗のようにつまらない者ですら採用されるのなら、私はなおさらであると考えて王のもとに集まるでしょう」などの故事が収められている。

（公文書研究官）